

活動報告書

報告者氏名 : 大木洋美 所属 : 菰山南小学校 記録日 : 2019年2月23日
キーワード : 学習支援、読み書き支援、自己肯定感、達成感、コミュニケーション

【対象児の情報】

学年 小学3年生(9歳)

障害 知的障害

困難の内容

- ① 理解力があるにもかかわらず学習意欲が低く、定着への取組や集中が継続しにくかった。
- ② 鉛筆を持つことにも抵抗感があり、書く場面で感情的になる場合も多かった。
- ③ 運動や活動への見通しがもちづらく、自発的に取り組めなかった。
- ④ 場をわきまえずに思いを発信し、環境の把握や相手意識に課題があった。



【活動目的】

- ・当初のねらい
 - ① iPadやPCを使って、自分に合った課題で集中して学習に取り組める。
 - ② 書くことの方法を広げることで、自らも表現することができる。
 - ③ 事前に画像や映像を見て見通しをもつことで、安心感をもって学習活動に参加できる。
 - ④ 興味のある教材や題材を使った話し合い活動によって、双方向のコミュニケーションを習得できる。
- ・実施期間 2018年4月～2019年2月22日
 - ・実施者 大木洋美
 - ・実施者と対象児の関係 学級担任



【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

<学習面に関して>

・周りの児童の行動や気になることがある
と、持続して課題に取り組めなかった。促せば取り組むが、早々にあきらめて投げ出してしまう様子が見られた。

- ・一斉指導の場面で、ぼんやりしていたり、手いたずらをしていたりすることが多かった。
- ・読書が継続しなかった。絵本などを選ぶが、内容を理解して楽しんでいる様子はなかった。

<書くことに関して>

- ・書き取りに継続して取り組まない割に、定着はよかった。しかし、書字に大きなストレスを感じていた。
- ・気が向くと、体験したことの様子や感想を詳しく話すことができた。しかし、作文となると「何をしたか忘れた」と、かたくなな態度になった。

<活動や運動への関心・意欲態度に関して>

- ・「疲れた」「～は苦手」「～したくない」と、よく口にしていた。
- ・水泳の授業は本人に合わせて進めたが、顔がぬれる不愉快さや恐怖心から、小プールで立ち続けていた。
- ・調理活動や栽培活動などで取り掛かりに出遅れ、進んで活動する様子は少なかった。
- ・運動や活動に対して不安感が先に立つ。交流学級での体育では、課題に参加せずにいることが多かった。

iPad 介入前の授業の様子
じっと動かなくなってしまう



<双方向のコミュニケーションに関して>

- ・場にそぐわない言動が見られた。注意や制止の指示に従うが、セルフモニタリング機能の低さが見られた。
- ・クラスの中では理解力が高いのだが、教え合いや学び合いの場面で自分より低い友達の評価を口にした。全体の雰囲気に影響するため、高評価を得にくかった。
- ・行事や生活単元の場合で、ネガティブな発言をしがちだった。

○活動の具体的内容

<自分に合った課題で、集中して学習できる取り組み>

- * 学力差のある児童が教科で同一の課題に取り組むことによって起きる達成の時差は、通常学級であれば上位の児童が教える役になって学び合いが成立するが、対象児は自己の優位性を証明したいゆえに周囲を見回して評価をしてしまうので、困難さがある。加えて、その発言により叱責を受けるので、優位性どころか真逆の結果をもたらす展開となっていた。
- * 個別的な課題で学力の定着をねらう手段として、「わたり」の形態（本来は複式学級のための授業形態。一人の教員が異学年の学習過程を同時並行して行うため、直接指導の時間をずらして児童間を渡り歩く。）を細分化することで、より対象児に適した課題設定が可能となった。



学習内容を 10~15 分刻みで設定した。
対象児の色は黄色。

対象児に応じた学習展開

音読 PC

「モチモチの木」の学習範囲を音読。

直に読むかデジタルか選んで読む(聞く)。

本時の課題

主人公「豆太」の性格や行動をつかむ。
ノートかワークシートに記入。

教師と一緒に本時の課題に取り組む。

iPad

「小学生漢字 3 年生」で漢字練習

アプリによる漢字の習得・習熟を図る。

問題集やワーク

「グレーズンの子どもに対応した作文ワーク」

問題集等で課題の定着・発展をねらう。

* 漢字や計算などの習熟を図るために

「小3 漢字ドリル」「あんざんマン」「あんざんマンと算ストーン」「反復計算ドリル」



* 課題の理解を補充するために

「分かる！小学算数3年生」「ぷらくろっく」



3 学年の内容「時間と時刻」を
時計のアプリを使いながら学習。



* 学びを広げる目的で

「NHKforSchool」の「ことばドリル」「お伝と伝じろう」「さんすう犬ワン」「マティマティカ 2」

NHK
for
School



* デジタル国語教科書の教師用（本来は電子黒板で一斉授業に使われるものを PC に入れた）は、物語や説明文の音声や、理解を助ける動画や映像資料、ルビ、新出漢字の書き順動画、拡大、反転等の機能がある。主に音読でのつまづきを軽減するのに有効であった。

デジタル教科書で、ルビを頼りに読んだり、音声機能を使ったりする。



学習展開と連動。 ☐ でデジタル国語教科書を活用している。

*読んで分かる読書の楽しみへとつなげるために

「読み放題」「NHKforSchool」の「おはなしのくに」



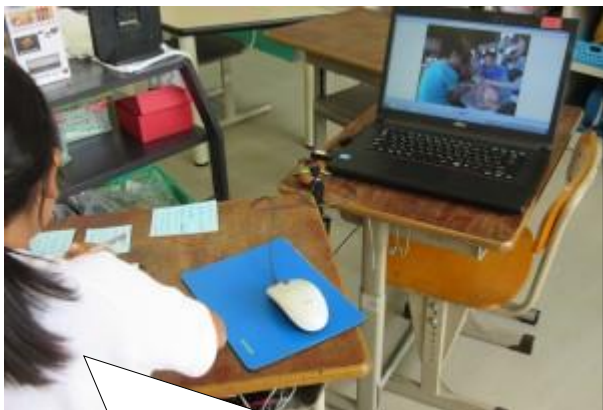
NHK
for
School



<「書くこと」の方法を広げ、抵抗感を減らす取り組み>

* 4月当初、iPadの練習で、撮った写真を見ながら、いろいろな気づきや感想を述べる姿が見られた。かつての対象児は、同様な場で「分かりません」「覚えていません」とかたくなに言い張り、周りの児童の発言にも耳を貸さなかった。自己の優位性を証明したいがゆえの表れと推察された。自分で気付いたものを自分で保管し、活用する流れが有効ではないかと考えた。4月末に「動物ふれあい体験」があり、国語科での「順序を表す言葉を使った作文」を書くことになった。そこで、「体験する→画像で記録をとる→画像を手がかりにメモを書く→メモと画像を手がかりに文章を書く」という手順で書いてみた。

* 「魔法のプロジェクト」で貸借したiPadは、miniとair2である。指導者としては、画面が大きい方が見やすいと考えて選択したが、体験活動等の妨げになるので、デジカメを使った。



写真を見て、動物ふれあい体験の内容や体験、気づきを思い出す。
(担任が付箋にメモ書き)

写真と付箋を手がかりに、三十分かけて作文四八〇文字！



画像を見ながらの作業なので、ノートを立てている。

<見通しをもって安心感して学習活動に参加できる取り組み>

* 調理実習では

「NHKforSchool」の「カテイカ」、家庭科デジタル教科書

NHK
for
School



＊作業的な学習の場面で、意欲的な児童が我先にと仕事を始める一方、対象児が活動に出遅れてしまう傾向があった。指導者からは、参加を促されたり、叱責したりされることが多かった。やりたくてたまらない仲間の中に身を置いている限り、対象児が達成感を味わったり、成功体験を増やしたりする機会は保障されていなかった。

＊5月初旬、学年行事や欠席等で対象児が一人だけになる期間があったので、当初は全員で実施する計画だった調理実習を一人で行うことになった。そうはいつても「ご飯と味噌汁」を一人で調理するのは難しすぎるので、作業が見通せるように「NHKforSchool」の「カテイカ」や家庭科デジタル教科書の映像を視聴した。



＊実際は5年生の通常学級の調理実習に場を借り、5年生の様子や教科担当の指導を見ながら取り組んだ。不手際はありながらも、時間や火加減を確かめながら作業を進めることができていた。「次は～?」「どうするんだっけ?」などと独り言を言いながらも、教師に頼るそぶりを見せず、淡々と作業していた。5年生から「3年生なのに一人でやって、すごいね。」と言われて、うれしそうだった。

体育のプール指導では

「NHKforSchool」の「はりきり体育ノ介」「子ども安全リアル・ストーリー」

NHK
for
School



＊学級活動で「水の事故」を扱った折、「NHKforSchool」の「子ども安全リアル・ストーリー」で、川遊びをしていて流されてしまった場合の救助の受け方を視聴した。6年生Aさんが「顔さえ浮いていれば生きていられる。」4年生Bさんが「大きな声で泣くと口に水が入ってしまうから、泣くのを我慢して上を見ている。」と発言すると、対象児が真顔で「わたし無理無理、怖くて助けなんか待ってられない。」と発言した。

＊対象児にとって、「水に慣れて」→「潜水して」→「水泳ができる」の学習活動自体が無理であった。現時点では、「水はこわい」→「顔は水から出して」→「命を守ろう」が、対象児には納得できると思えた。実際、対象児も「すすんで泳ぐのは嫌だけど、おぼれたときには助かりたい。」と発言していた。

＊見学の児童に写真を撮ってもらい、それを見ながら課題を決めていった。既に様々な場面で、自分で気付いた画像を自分で保管し、活用する流れが有効と分かってきたので、今回もそれを試みた。下左側の写真は、対象児が撮影したものである。「私たち（担任とAさん）を撮って。」と頼んだが、担任の顔より水面の方が気になるようだった。記録のノートに「きゅうめいどういをきれば、水からはなれてあんしんです。」「お水が動いてやってくるから、水を見ながら気を付ける。」と書いていた。



対象児が撮影。担任の首が切れている。水面が場面の大半を占めている。水の存在がいかに大きいか分かる。

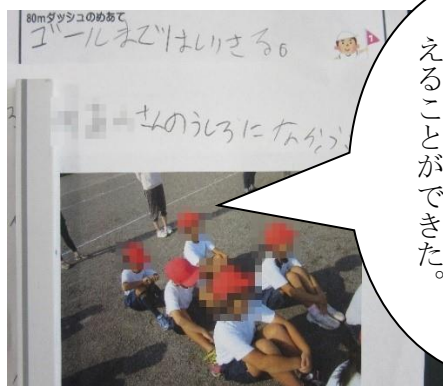


救命胴衣効果で足が床から離れ、体勢も水平に近くなっていた。



体育的行事「運動会」では

- *運動会については、負担加重であろうと思われる種目については、参加の仕方を配慮したり、参加しなかったりということをして、7月中に保護者や本人と話し合った。
- *競技種目は、交流学年や学年団で行い、教諭が複数付くが、私は他の児童の授業があるため、付き添うことはできなかった。そこで支援員さんに活動の画像や映像を撮ってもらった。それを大型 TV で視聴できるようにした。



画像を手がかりに、自分の待ち位置を覚え、どう参加するかを考えることができた。

- *種目ごとに、自分の並ぶ位置やフォーメーションを写真に印刷して、時系列に沿って後ろの黒板に貼っていった。

対象児は余白に覚え書きをしていった。練習に行く前にじっと写真を見ながらぶつぶつ言っているの、尋ねると、「今日は、ソーラン節を全曲通してやります。わたしは、大体踊れます。分からなくなったら、周りの人のまねをします。」と言っていた。

自分の立ち位置などは、映像を手掛かりに覚える。

安心感をもって行事に参加



わたしはココ！

ハイハイ！



「運動は苦手だけど、やります。」「できるところまで、やってみます。」

<興味のもてる話し合い活動によって、双方向のコミュニケーションを習得する取り組み>

- *表現の表出が独りよがりであるせいか、理解力では支援学級の上位にいらながらも、関わる教員から好意的な評価を得られにくい傾向があった。
- *昨年度までの個別の教育支援計画では、その都度言い直しをしたり、「そう言うと相手はどんな気持ちがするかな？」と問いかけたりしていた。しかし、口を開けば小言、問い返し、言い直しを強いられて、徐々に黙り込むようになってしまった。

対象児にとって、自己本位になりにくいコミュニケーションの環境を設定する必要があると考えた。本年度の計画には、学級活動や道徳科での話し合い活動を位置付け、意図的・計画的に双方向のコミュニケーションの育成を図ることを盛り込んだ。



学級活動・日常生活指導では

「NHKforSchool」の「スマイル!」「子ども安全リアル・ストーリー」

NHK
for
School



- *対象児は、かわいいキャラクターを好み、持ち物をピンク系に揃えている。身なりにもフリルやリボン等が詠えてある。対象児自身も、「プリキュアとか芦田愛菜ちゃんが好きだ」と言っていた。「NHKforSchool」の「子ども安全リアル・ストーリー」は、芦田愛菜が進行役を務める番組である。また「スマイル!」は、登場人物がひらひらしたコスチュームの女の子たちである。こうした番組を「学級活動」や「日常生活の指導」に組み入れていけば、セルフモニタリング機能の弱さを補完できると考えた。

道徳科では

「かがやけみらい」 「NHKforSchool」の「銀河銭湯パンタくん」 「ざわざわ森のがんこちゃん」
「時々迷々」

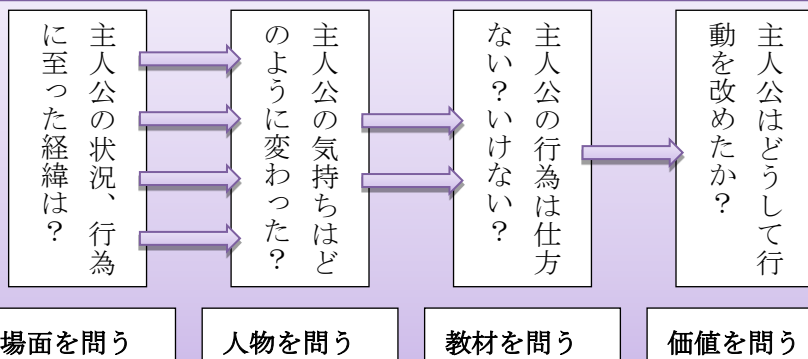


NHK
for
School



＊年度当初に、「NHKforSchool」の「銀河銭湯パンタくん」（以下「パンタくん」）「ざわざわ森のがんこちゃん」や地区採択した道徳教科書「かがやけみらい」（学校図書）デジタル版1学年を視聴した。5月後半、iPadやパソコンの操作に慣れるという目的で、好きな番組やアプリを視聴する試みをしたら、対象児を含めた大多数が「パンタくん」を選んでいった。対象児の興味・関心が主人公パンタの行動に向いていたので、そこを中心に授業を構成していけば、自分の考えをもって発言できるのではないかと考えた。

＊校内研修や地区の特別支援教育部研修で道徳を扱うことになり、研修機会を得た。その中で、授業を構造化していく手法が紹介されたので、取り入れてみた。



読み物教材「心と心の握手」



教科書教材「11 ぴきのお月見」



映像教材「銀河銭湯パンタくん」
「ちいさい迷子さん」



背筋を伸ばした姿勢で話合いに
参加する対象児

【対象児の事後の変化】

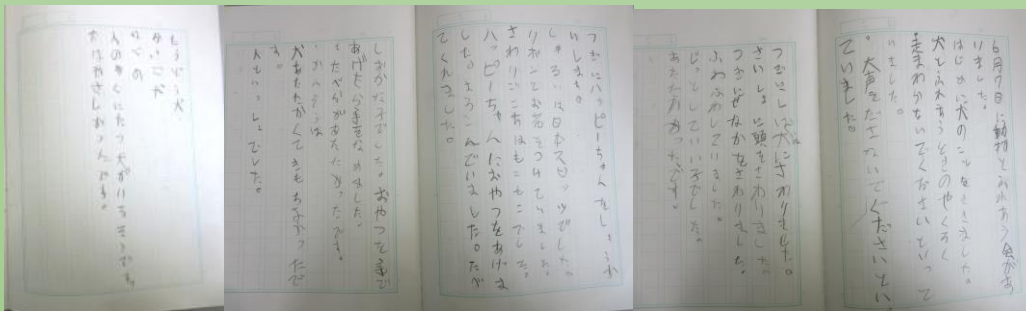
<学習面に関して>

- ・学習過程が 10 分から 15 分刻みなもので、気持ちを切り替えて取り組めた。また達成目標を国語・算数テストが 60 点以上と取り決めたら、得点を励みにする発言をしていた。達成感や満足感を味わっているのか、周囲を見回す必要がないのか、以前のような不適切な言動がなくなった。また、時間が来ても「この問題を全部やり終えたい。」と、学習課題に持続して取り組んでいる。
- ・他の児童に比べると、ぼんやりしている姿がないとはいえないが、「今は～です。」と黒板の掲示を指差すと、即座に学習に向かえるようになった。国語と算数授業での手いたずら等は、皆無である。
- ・読書に関しては、キャラクターものの料理や工作の本を手に取り始めている。

<書くことに関して>

- ・漢字については、鉛筆を持つことは相変わらず好きではないようだが、iPad での「小 3 漢字ドリル」や「小 3 ネコ漢字」は大好きである。家庭でもデジタル環境を整えて、同様のアプリで練習している。

対象児の作文ノート

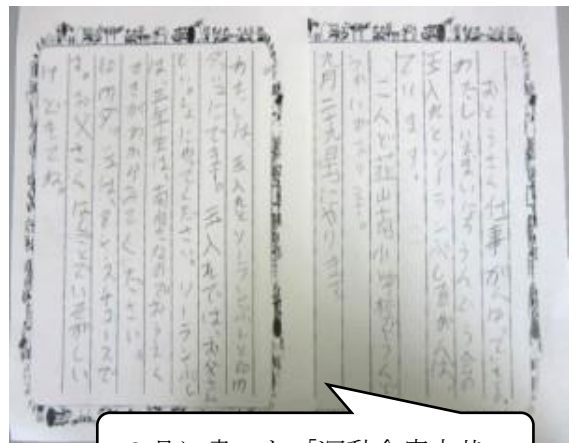


- ・原稿用紙の使い方には学習空白があるが、体験と気づき、感想は書けた。
- ・一斉指導での説明も理解していたことが判明。

- ・当初は iPad を使ってこの学習を進めるよりも、デジカメとパソコンの方が操作に慣れていたが、7 月以降には導入セミナーで知った音声を変換できるアプリ「Onenote」の操作を覚え、それをきっかけに音声入力やフリックパレットを使い始め、ますます文を書くようになった。画像の記録によって文章を書き始めたのは、大きな成果である。放課後等デイサービスで「わたしは最近作文も書けるし、漢字も覚えるようになった。だって 3 年生になったから。」と説明しているそう。



参観日に作文発表して嬉しそう。



9 月に書いた「運動会案内状」

<活動や運動への関心・意欲態度に関して>

- ・以前は体育等で頻繁に「疲れた」と言っていたのが、最近は「楽しい」という言葉が増えている。
- ・保護者によると、今までは洗髪に手間がかかっていたそうだが、このごろは頭からシャワーを浴びたり、洗面器に頭をつけたりするようになったそうである。今まで家でしなかったプールでの様子を話すようになったとも聞いている。
- ・対象児は、画像から自分の位置を感覚的につかんだり、映像を見ながら練習をしたりすることで、不安感が減った様子だった。運動会合同練習では、「リレーはやらないと決めました。だからソーラン節はがんばります。」と納得した様子だ。実際、ダンスの動きはややぎこちないが、常に課題に参加できていた。
- ・複数で取り掛かる場面では相変わらず出遅れているが、自分の役割がはっきりしている当番活動等では、問題なく活動に取り組めるようになった。

<双方向のコミュニケーションに関して>

- ・自分の言いたいことがあると、周りに関係なく話を始めることが少なくなり、時には「～さんの意見と同じで～です。」という言い方もできるようになった。徐々に双方向のコミュニケーションがとれつつある。
- ・低学年の児童の言動に対して、自分を抑えて対峙する様子も見られるようになった。
- ・行事や生活単元が近日中にあると、「～が楽しみです。わたしは～をやる予定だからです。」と言い出し、「実は～は苦手なんだけど、他に楽しいことがたくさんあるから、『まあ、いいか』にします。」とも話していた。

【報告者の気づきとエビデンス】

(ア) 報告者の主観的気づき

- ① 学習面については、対象児はこれまで国語算数については自ら進んで課題に取り組む姿が少なかったが、iPad やパソコンを導入して、音読や漢字計算、発展学習や調べ学習を 10 分程度で構成した授業では、黒板の掲示を見て「次は～」と確かめながら学習するようになった。時には、「先生が私におしえる番です。」と、教師の指導を促す発言も見られた。

- ② これまでは、文を書くというと、筆記用具を持つのも億劫という様子だったが、体験を想起できたり、書く方法の選択ができたりすると、意欲的に書く姿が見られた。



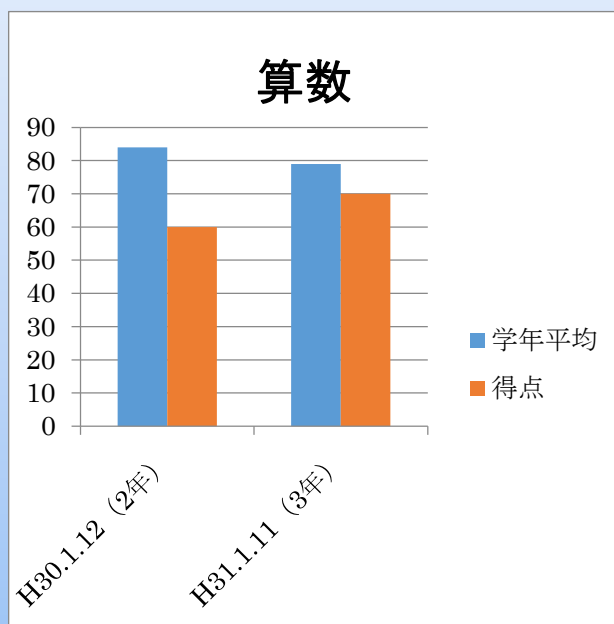
- ③ 運動や作業で出遅れがちだったが、事前に画像や映像を見て見通しをもてば、安心して学習活動に参加し、自分でもできるところまではやろうという姿が見られた。



- ④ 今まで道徳や学級活動などの話し合いでは、机に突っ伏していたり、気が向くと話題に沿わない発言をしたりしていたが、他の子の発言に重ねて発言をしたり、違う意見を述べたりするようになった。



学習の定着について



なお、以下は単元テストの実施結果である。タブレット介入後の向上は、顕著である。

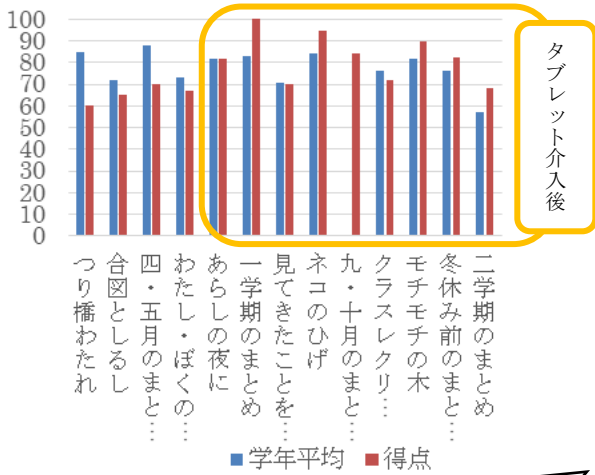
平成29年度算数

項目	学年平均	2学期・中間の得点
ひょうとうグラフ	85	65
1000までの数	72	45
たし算のひつ算	68	50
ひき算のひつ算	68	65
時ごとく時間	62	30
長さ(1)	92	40
水のかさ	63	20
三角形と四角形	73	80
かけ算(1)	80	100
かけ算(2)	60	80
かけ算(3)	75	80
分数	75	80
2学期・中間の得点	85	60

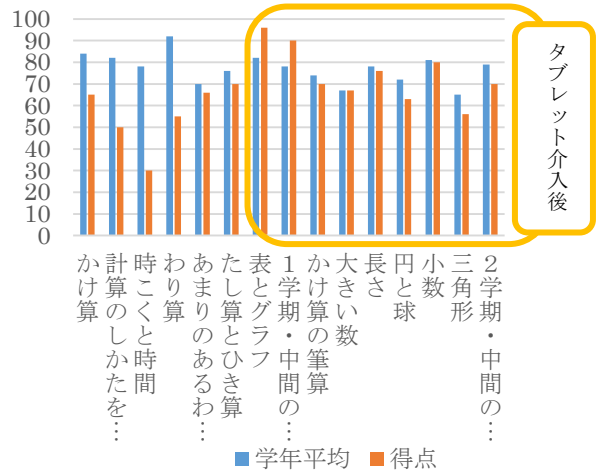
■ 学年平均 ■ 得点

当初は、テストを受けること自体が困難だった。

平成30年度国語



平成30年度算数



タブレット介入以降、テストの得点が向上した。

【今後に向けて】

- ① 技能習得や学習を支えるツールとして
 - ・国語、算数の技能の習得や知識・理解の定着を計るだけでなく、より多くの知識を調べたり、分かったことをまとめたりすることで、より主体的な学習に進めていく。
- ② 書くことの方法を広げるツールとして
 - ・体験を想起することに加えて、体験内容や感情を整理したり、自分の思いを書き言葉に変換したりしていく。書くことの豊かさを体験できるようにしたい。
- ③ 運動や活動の見通しをもつツールとして
 - ・事前に与えられた映像を見るだけでなく、自らが自分に必要な情報は何かを考え、映像を選ぶような環境を整えて、不安の解決への手立てを必要に応じて自分でも探そうとするスキルをもたせたい。
- ④ 双方向のコミュニケーションを支えるツールとして
 - ・本年度取り組んできたことを継続して、道徳的な価値の自覚がもてるようにしていくことや、日々の道徳的実践力を育んでいきたい。